
東西

緋牡丹のサラシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東西

【Nコード】

N8380P

【作者名】

緋牡丹のサラシ

【あらすじ】

ある年齢になると東と西の地域に強制的に移動させられる

移動した先で何かが始まる

一（前書き）

書きなぐったものです

小説とよべるような代物ではないですが

ゆっくり最後まで書いていきたいと思います

よろしくお願いします

ジリリリリッッッ

けたたましく鳴り響く目覚まし時計を乱暴に掴み思いっきり地面に叩きつける

時計はゴシャッと鈍い音をたて転がり壊れた

バサッと布団をはぎ起き上がるそして背の低い青年はこうつぶやく「眠い・・・」

そう言いまた布団を被り体を横にしようとしたその時

「いつまで寝てんだ！」ドアを開くと同時に大きな声をたて部屋へ入ってくる男

ビククリした俺は飛び起きた。

間髪いれずにその男が叫ぶ

「おい今日は何の日かわかってんのかさっさと起きて支度しろ！」

荒々しく声を張り上げる男

寝起きで何がなんだか分からない俺は敬礼のポーズをし「ふあ、ふ

あい」などと

情け無い返事を返した

「何だよそのポーズ」男は俺を指差しながら笑った

この声、笑い声

何処かで聞いたことがある

眠気を覚ます為に俺は両手で頬をピシャッと叩く
ぼんやりとした視界が鮮明になっていく

「うつす！ やつと目覚めたか」男は右手を上げ軽い挨拶をした

この顔は見覚えが有る

狐の様な顔にひよろつとした体格、高身長

こいつは俺の親友でもあり幼馴染でもあり腐れ縁でもある男

「朝一発目に見る顔がお前かよ気持ち悪い」

起こされた苛立ちとさっきの無様な敬礼ポーズを思い出し照れ隠し
と皮肉を込めて言葉を放つ

「そう言っなよ俺が起こしてやらなかったらお前さん集合に絶対遅
れるだろ」

「しゅ・・・集合？ 集合ってなんだっけ？」

服を着替えながら問いかける

背の高い男は一瞬驚いた表情を浮かべ、その後呆れた顔で

「毎年18歳になった奴らはこの日に招集されるの知ってるだろ？」

「ああ知ってるよ、何で俺たちが行かなき・・・」

「あっ・・・」

言葉が詰まる

「誕生日おめでとさん」

背の高い男は笑顔で俺にそう言った

「今日誕生日だったのか忘れてた。サンキューな」
少し照れながら笑顔で返す

続けて喋る

「招集とかめんどくさいな何の為に集められるんだよ」

背の高い男は頷き、窓を開け外を見ながら

「18歳になった事だし国がお祝いでもしてくれるのかもな。ん
じゃ先に外にいとくぜ」

背の高い男はおちゃらけた感じで言うつとドアを開け部屋から出て行
った

「おつ、おいちよつと待てよ」

靴下をピョンピョン跳ねながら履き

机の上に置いてあったカバンを肩にかけ急いで部屋を出る

二（前書き）

誤字脱字多いですが生暖かく見守ってくださいれば幸いです

行つて来ますの挨拶さえもろくにないまま家を飛び出た外で待っているはずのあいつがいない

「あの野朗待つててくれてもいいだろーがよ」
チツと舌ウチをしてその場でしゃがみ込む

「おーいわりいわりい」
聞き覚えのある声が聞える

「集合場所まで自転車で来こうと思ってね」

背の高い男はチリンチリンとベルを鳴らしながら近づいてきた
何故だかイラッとした

後ろの荷台を手でぺしぺしと叩く

「後ろ乗れよ」

男同士で二人乗りなんて正直・・・と思いつつも
後ろに乗る

「時間ないから飛ばすよ」

「うむしっかり頼むぞよ」

何故か偉い身分になったような言葉になる
青年は続けて喋る

「集合場所って何処なんだよ？」

背の高い男は自転車を走らせるのに集中しているのか
風の音で聞えていないのだろうか

問いかけには返事をしなかった

自転車で走る事1時間

黒い屋根の大きな建物が見えた

背の高い男は腕時計をチラチラと見ながら

「あれだあれだ間に合ったみたいだゝ疲れたよ」

「うむ大儀であつた」淀んだ

近くで見ると大きさに圧倒されそうな建物

「こんな建物いつできたんだろう」

小声でつぶやいた

二人は自転車を降り大きな建物の入り口へと歩いていく

入り口に近づくにつれ異様な雰囲気とする

重々しいどす黒く淀んだ空気

気を抜けば腰を抜かしそうなほど重い空気

まるで背中に何かを背負っているかのような感覚

不安ばかりが脳裏をよぎる

建物入り口に着く

そこには熊程ではないが大きな体をした屈強な警備兵
ざっと見て50人、いやそれ以上

「やばそうな奴らがいるな戦争でもはじめるつもりかよ」
俺は小声でつぶやく

とその時

「お前は今年１８歳になった子達か？そうじゃない部外者なら出て行け」

大きな体をした警備兵は鋭い目で俺を睨みつけ荒々しい口調で話しかけてきた

「はい１８歳になったばかりです今日この建物に集合と聞いて来ました」

ビビッタ俺は丁寧に必要な声で返事をする

「そうかおめでとう会場はこの建物入ってすぐ左の階段を下りた場所だ」

先ほどの荒々しい口調とは違い警備兵は笑顔で優しく会場までの道のりを教えてくれた

おめでとうと言われた時に何故か背筋に寒気が走った

警備兵の笑顔が少し怖く感じた

俺達は丁寧にお礼を言い建物に入る

入ってすぐ左の階段を下りる 階段は薄暗く狭くそして寒かった

コツコツコツ

階段を下りていく

コツコツコ・・

何処まで下りて行くのだろうか

「階段長いな一体何処まで下りていけばいいんだ」
足を止めて俺はぼやく

背の高い男は黙って頷く

「お前ビビッテんの？」

さつきから黙ってばかりいる背の高い男を心配してか俺はいつもの調子で煽る

「うるさいな歩けよ寒いからさっさと下りたいんだ」
背の高い男は少し不機嫌そうに答える

「ああ寒いのが苦手だったっけかわりいな」
不機嫌そうなのを察し俺もいつもの調子で謝る

コツコツコツ

まだ下りる

まだまだまだまだまだ下りる

階段を下り出して20分程たった
ゴーツという音と共に

「お・・・と・・・う」

声？音？が聞える

会場がもう近いんだろう

そう思い俺達は歩くペースを上げた

下りていくにつれてはつきりと聞えてきた

「おめでとう！」

ドゴーンパチパチパチ

会場で既にパーティーでも始まってるのだろう
俺達は更にペースを上げた

階段を4段飛ばして駆け下りる
こんな荒業を使っても転げない俺の運動神経は見上げたものだなんて
思いつつ階段を飛び降りていく

そして目の前に大きな黒い扉が現れた
あめでとうの声はこの扉の中から聞えてくる

「遅刻してんのかな俺たち・・・入るのためらうちまうな」

背の高い男は小さく頷く

「でも入らないと駄目だよな・・・しかたねえ入るか」

二人は大きな扉を重々しく押し開ける

目が潰れそうなほどのまぶしい光
耳をつんざくとてつもなく大きな歓声
爆発音ともとれるような拍手
巨人でも収納できそうな部屋

暗い階段を歩いてきた俺達
いきなりのまぶしい光によって一時的に視力を奪われる

甲高い声の男がいきなり拡声器らしきもので叫ぶ

「welcome! welcome! ようこそ18歳! おめでとう
! おめでとう! 18歳!」

階段に聞えてきたあの音はこの人の声だろうと俺は一瞬でわかった

三（前書き）

頭に浮かんだの書きなぐっていくと
ふと思いました

これは、高見広春さん作品の小説の影響が大きいなと
あえて作品名は出しませんがもっと構成を練るべきでしたと今更後
悔しています

三

爆音の如くなり続ける拍手の雨

この国では18歳になるとこんなにも喜ばれる事なのだろうか

甲高い声の男

「君たち長い階段疲れただっろーん、さあこれでも飲んでその席に座ってさあさあ」

胡散臭い小太りでピエロの様な顔をしたおっさんは
淒くいい笑顔で左手に持っているステッキで席を指し

テーブルに置いてある黄色いドロドロとした飲み物？液体く？を渡
してきた

席に座ろうと振り返る

そこには数え切れないほどの人、人、人
これは全員18歳の子達なのだろうか・

俺達は人を掻き分け指された席についた

甲高い声の男はまだ喋る

「実にいい！excellent！marvellous」！
まだ喋る

「今年は豊作だ実にいいいいい」

人間のテンションとは思えない程のはしゃぎ用

例えるなら子供がどうしても欲しいおもちゃを買ってもらった時や
休日に遊園地に連れて行ってもらえる時の喜びはしゃぎ用

薬でもやってるかのようなテンションに俺は少し引き気味でもあった

甲高い声の男

「さてお時間が来ましたねえっう皆席につきましたっねっえええ」

笑顔で両手を揉みながら拡声器らしきもので叫ぶ

「何故ここに集められたか分かるかな？」

急におっさんの顔がシリアスになる

「分からない人手えあげてえん」

オカマ口調になったりシリアスになったりと忙しいおっさん

手を挙げる人などいなく

皆好き勝手に話をしたり暴れだす人もでてきた

「ちょっとおじさんの話聞いてねん」

オカマ口調のまま甲高い声の男は喋る

「今この国は東と西に分かれてるの知ってるよねん？」

「何で分かれてるか分かるう？はいはい分かる人手えあげてえ」

甲高い声の男の話など聞く耳持たずで

騒ぐ18歳の男の子達

甲高い声の男は拡声器を地面に投げつける
ドガンガタンピーーーーーー

音に驚き騒いでた子達の動きが止まる

「聞けよクソガキドもおおオオオ」

先ほどとは違った顔

オカマ口調甲高い声とは違いドスの聞いた声に変わる

「お前達はこの国の現状分かてるか、絶望的ナ食糧不足、万年性
欲のとまんねえクス共のおかげで

増え続けるクソガキの数」

「少し減らしたいよねん ミ」

おっさんの口調は変わる

「よく聞いてねん簡単な話なのよんっ」

「東と西に分かれてお互いに数を減らしあうのよん」

「勝ち残った東軍か西軍は北の都市に移動して普通の市民として暮
らせることができるのよん」

「勿論あなた達のお兄さんやお姉さんも参加したのよこの戦争にい
iiiiiiii」

おっさんはニヤリと笑いながら喋る

話は変わるが俺には3つ離れた兄貴がいた

俺は物心ついた時には親はいなく血の繋がりは兄貴唯一人だった

3年前に兄貴も招集されたが翌年には毎月仕送りと元気ですとの手
紙が届いている

手紙には戦争についての事は何一つ書かれてなかった
唯唯元気ですとかかれていた

この東西戦争は国の極秘プログラムであり
食糧危機の為に口減らし

俺はそう悟った

四（前書き）

続きです

よろしくお願いします

四

18歳の青年達は恐怖のあまり両親、最愛の人の名前を泣きながら叫びだす者もいる

中には逃げ出そうとし警備兵に捕まえられ手に持っている堅い棒の様なもの

めった打ちにされ席に戻される者もいた

おっさんは淡々と喋る

「別に死ぬわけじゃないのよ、勝てばいいのよん勝てばん」

「全てが終わればまた普通の生活に戻るわよおおおっほっほっお
お」

おっさんは豚のように鼻をならしながら
腹を抱えて笑っている

俺も気が気ではなかった

俺が気を取り乱すと背の高い友人にも影響がでしまうと思い
俺は下をうつむいたまま震える足を押さえクールに決めて見せた

「さてとどっち行かなー」

ぼそっと呟き友人の方をチラッと見た

背の高い友人は怯える素振りも見せず

「俺はどっちでもいい」

と呟いた

友人の口元は少しニヤリと緩んでいたようにも見えた

「どつちでもいいって！？俺たち戦争しあつのは嫌だぜ一緒に東へ行こう」

俺は焦りながら友人に同じ軍になろうと促す

「そうするかなあゝ東いつちやおつかあ」

いつものおちやらけた感じで背の高い友人は喋る

甲高い声の男

「はいはいお喋りはそこまでよんっ目隠し渡すわねん」

そう言つと目隠しを配布し始めた
列の前から目隠しが回されてくる

後ろを振り向いて目隠しを回す時の子供たちの顔は

泣き顔だつたり

笑顔だつたり

怒りだつたり

戦争できるのを喜んでいたり

こんな極限状態だからこそ人間の本当の喜怒哀楽を見れたのかも
しれない

甲高い声の男

「後ろまで回つたら目隠ししてねん」

「さあ行くわよ」

「東へ行きたい人手え挙げてえええんん」

生きる為の戦争
俺達の東西戦争がはじまる

五（前書き）

年末はのんびりしてるので
ぼーっと書きなぐりいい

よろしくお願いします

五

東に手を挙げた奴は何人くらいいるのだろうか
もしも俺と友人の二人だけならどうする・・

ザッザッと人が歩く音がする

警備兵が歩く音だろうか・・

目隠しされるつてのは本当に怖い

目が見えない分耳が敏感になる

警備兵数十人が歩く音にさえも腰を抜かしそうだ

俺の背後にも足音は近づいてくる

ピタッと止まり挙げていた右手を掴まれる

「さあ歩け」

低いトーンの声で歩くように促される背中には堅い突起物を突きつけられている

これは人を殺す道具

銃なのか

「歩きますよっ」

怖かった

足は震え前に進むもうにもうまく進む事が出来ない

「さっさと歩け！」

低い声で怒鳴られる

暗闇の中銃を突きつけられ怒声を浴びる

俺じゃなかったらチビっててもいい情況

しかし心とは裏腹に俺は既に3滴程チビっていた

横の友人も

俺同様銃を突きつけられ

歩けと言われる

友人も一緒に東に来てくれたと

逆に安心してしまった俺は情けない

歩く音から推測すると東には座っていた子供たちの3分の2程が来たのだろうか

数が多いとやはり少しは優勢になるんだろうか

俺はまだ戦争をする実感が無く自分の安否だけを心配していた

「ここで止まれ、目隠しを外せ」
目隠しを外す

そこには黒い大きな扉があった

階段を下りた時に開けた大きな扉と同じサイズ
唯違っていたのは黒く大きな門の真ん中には

赤い文字で堂々と

東

ここからスタートなんだな

横には友人がいた

友人はずっと黙ったままで門の東の文字をずっと見ている

ここで一人が声をあげた

「勝てば帰れる勝てば帰れるんだ」

座り込んでいた女の子も立ち上がり言う

「そうよ勝てば帰れるのよお母さんにも会えるのよ」

一瞬にして東の軍の士気が上がった

しかしそうは言ってみるものの本当に戦争を始めるつもりなのか
中には知り合い同士 恋人同士も敵に回す事になるだろう

こいつらは平然と殺し合いができるのか・・・

狂っテヤがる

いやおかしい

さっきまで泣いていた女の子も今は戦争に乗り気だ・・・

何があつた

まさか

あの黄色い液体が

俺は固形物系の飲み物は喉越しが悪くてあまり好きではない
飲まずに椅子の下に置いたままだ

友人も何か臭いがおかしいと言い飲まなかった。

とその時拡声器を使い聞こえてくるあいつの声

甲高い声の男

「両軍門の前に揃いましたね」

「IT・S SHOWTIME!!!!!!!!!!!!!!」

ギギギギギギギギ

門が開いた

「いくぞおおおお!!」

門の先頭にいた男の子達は叫びながら全速力で走り
雨が降る密林の中に消えていった

俺は戦争がしたくない

適当に逃げて隠れて戦争が終わると同時に出て行こうと思ってた

卑怯 ずる賢い 何といわれても言い

俺は殺しはしたくない

殺されたくも無い

ただ無事に帰りたいそれだけだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8380p/>

東西

2011年1月3日20時26分発行